



❖ 学術シンポジウム ❖

龍谷ミュージアム春季特別展
「真宗と聖徳太子」関連イベント

聖徳太子と真宗の文化遺産
—秘伝・図像と信仰の世界—

2023年5月20日(土)13:30~17:00
龍谷大学大宮キャンパス東翼 101 教室



会場の様子



❖ 概 要 ❖

2023年5月20日（土）、龍谷ミュージアム春季特別展 親鸞聖人御生誕 850年・立教開宗 800年記念「真宗と聖徳太子」展の関連イベントとして、学術シンポジウム「聖徳太子と真宗の文化遺産——秘伝・図像と信仰の世界」が開催された。

親鸞聖人が深く崇敬された聖徳太子への信仰は、浄土真宗において豊かに花開いた。今回のシンポジウムでは、聖徳太子について造詣深い研究者のうち、吉原浩人氏（早稲田大学教授）・津田徹英氏（青山学院大学教授）・西岡芳文氏（上智大学教授）をお招きし、文学・美術・歴史の各分野から、太子伝の秘伝や、太子の尊像、また東国の太子信仰について講演を頂戴した。加えて、一本崇之氏（大和文華館学芸員）・村松加奈子氏（龍谷ミュージアム准教授）の2名の美術館の専門家から、太子絵伝についてコメントを述べた。当日は、阿部泰郎氏（龍谷大学教授）の司会の下、活発な意見交換が行われた。

登壇者一同：阿部氏・吉原氏・津田氏・西岡氏・一本氏・村松氏





以下、各講演・報告の梗概を記す。

まず、吉原氏は「『聖徳太子絵伝』の秘事口伝—救世観音の転生と真宗—」と題する基調講演において、数ある絵伝の未解決の謎のうち、6点を取り上げた。①瑞泉寺本『聖徳太子絵伝』第一幅に、なぜ釈迦如来と善光寺—光三尊の並坐像が描かれるのか。②瑞泉寺本『聖徳太子絵伝』第七幅最上段の場面は、何を表しているのか。③称名寺本『聖徳太子絵伝』第四幅上から二段目右「□□□□□馬頭夫人^{めずぶにん}事」は、何を表しているのか。④本誓寺本『聖徳太子絵伝』第三幅の最上部には六角堂建立が、それ以下には膳妃婚姻譚が描かれ、第五幅上部から順に、四天王寺・善光寺・太子葬送・親鸞伝が描かれるが、なぜなのか。⑤本證寺本『聖徳太子絵伝』第四幅には、巖島神社・熊野大社・道士勝負・守屋合戦が同一画面に描かれ、本證寺本『善光寺如来絵伝』第四幅の上部には芹摘姫説話が描かれ、下部に善光寺伽藍が大きく描かれるのは、なぜなのか。⑥『親鸞聖人伝絵』上巻「六角夢想」では、親鸞が白衣の如意輪観音を拝み、「蓮位夢想」では聖徳太子が親鸞を拝むが、なぜなのか。これらの問題について、『上宮太子御遺言記』『聖徳太子内因曼陀羅』『今昔物語集』や、『後漢書』『法苑珠林』『集神州三宝感通録』など日中の史資料を駆使して分析を行い、仮説を提示した。

ついで、津田氏は「十四世紀前半における真宗門徒の太子造像の諸相—遍在と偏在の問題をめぐって—」と題する報告において、真宗門徒の太子造像をめぐって、愛知・妙源寺三幅本「光明本尊」和朝幅部分を取り上げ、年記を伴う現存最古の彫像とみなされる茨城・無量寺像をはじめ、中世真宗で受容をみた振り分け髪童子形太子像のうち、特に十四世紀に遡る七条袈裟を着用する作例との比較を施した。太子単独の造像である場合と、伺候する僧俗を伴う場合における太子に対して何が求められたのか、その働きがどのように表現されたのか、などについて、造像の持物や袈裟の着法など美術学の面から細かな説明を行った。その上、これらの造像にみられる特徴的な違いから、真宗門徒の太子造像における地域偏在性を語り、各地域の造像に貢献した人物の存在を探った。

最後に、西岡氏は「東国初期真宗と聖徳太子」と題する報告において、歴史学の立場から、親鸞入寂後の東国真宗門徒の動向、とりわけ東国真宗が全国に展開していく過程や、他宗（浄土宗）から批判を蒙った真宗門徒の太子信仰などの問題を取り上げ、年表等史資料をもって紹介を行った。特に、シアトル美術館（米国）所蔵「源誓上人絵伝」（甲斐万福寺旧蔵）に描かれる佛光寺落慶供養の場面（西岡説。一般的には本願寺を表したものとされる）から、関東の門徒たちが雑多な存在ではなく、京都に佛光寺を建立する際、相当な支援者が存在したのではないかとの持説は、興味深い。関東で発達した東国真宗というのは、ネットワークをしっかりと繋がって、一致した行動をとったのであろうと推測した。